



Title	活動の組織展開と介入者の学習
Author(s)	淀野, 順子; Yodono, Junko
Citation	社会教育研究, 28, 15-27
Issue Date	2010-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42854
Type	departmental bulletin paper
File Information	SAE28_002.pdf



活動の組織展開と介入者の学習

淀野 順子

目 次

1. はじめに	15
2. 活動と組織展開	16
(1) 活動の背景	16
(2) チコ _ロ ナイの活動	17
(3) チコ _ロ ナイの組織展開	17
(4) 組織・実践の展開と介入者のかかわり	19
3. 介入者の学習	20
4. 活動と学習サイクル	22
5. 当事者との話し合いにおける学習と活動展開	23
(1) アドバイスとしての尊重	23
(2) 当事者による違和感の発信と介入者の気づき	24
(3) 当事者による運営へ	25
6. おわりに	26

1. はじめに

筆者はこれまで、内発的発展論を地域づくり主体形成の面から論じるにあたり、自然環境保全・再生活動を行うチコ_ロナイを事例として取り上げてきた。このチコ_ロナイは地域外住民からの提案により組織されたが、近年では地域住民が理事長に就任し、理事長を中心とした事務局が運営を行うものへと発展してきた。さらに現在では、地域の子どもたちの協力を得ながら植林・育苗活動を行うなど、地域住民による地域づくり活動になりつつある。

内発的発展においては、地域住民の主体的な内発的発展のためには学習が重要であることが指摘されてきた（宮本 1998¹、保母 1996²など）。しかしその学習の内実については、詳しく論じられていない。そのため、内発的発展としての活動における学習に着目し、地域づくり主体形成の学習の内実を明らかにすることが筆者の目的である。

本稿では、活動における学習の内実を明らかにするにあたり、活動理論を足がかりとしたい。この活動理論における学習は、実践者が協働しながら「活動システム」を編み直していく、相互の学び合いと育ち合いの学習と言える(山住 2004)³。活動理論は、実践者たちの「活動システム」の中にある問題状況をいかに批判的に理解し合い、批判をシステムの「矛盾」と捉え、課題として高め、実践活動の問題解決を図り、新しい活動をデザインし、実行に移していくのか、を究明しようとするものである(エンゲストローム 1999 など)⁴。この活動理論は、地域づくりの主体形成を考える上で、地域の問題を捉え、課題として高め、課題の解決をはかりながら実践をし続けるという、活動における学習の内実を明らかにする一端となると考える。

山住は、「活動理論的研究は、仕事や組織の実践活動の「発達」をめざす「介入」の試みといえるもの」としている。つまり、実践活動の発達における「介入」のあり方を明らかにすることが、実践活動の発達とそこでの学習の解明に大きくかかわると言えるだろう。

本稿で着目するチコ_ロナイは、地域外住民からの働きかけを契機として組織され、地域住民と地域外住民が協働して活動を続けている。いわばチコ_ロナイは、当事者としての地域住民と、介入者としての地域外住民が協働して活動する組織である。チコ_ロナイの展開において、地域住民と地域外住民の関係、つまり当事者と介入者の関係を考察することなしには、実践活動の発達と、内発的発展としての地域づくり主体形成を論じることはできない。

そのため本稿では、実践活動の発達における介入のあり方を考察することを目的とする。このため、地域外からの介入が実践活動の発達にいかに関わったかを、組織形態の変化から明らかにすることを第1の目的とする。次に、介入者が行った学習活動とはいかなるものであったかを明らかにすることを第2の目的とする。さらに、介入者と当事者との対立とそこでの学習が、いかに実践活動の変化に関わったかを明らかにすることを第3の目的とする。上記3点から、実践活動の発達における学習の条件を示し、実践活動の発展における介入のあり方を考察したい。

2. 活動と組織展開

(1) 活動の背景

本稿で取り上げるチコ_ロナイが活動をしているのは、北海道沙流郡平取町である。この平取町は、町名を含む地域の地名の多くがアイヌ語に由来していることから分かるように、アイヌ民族が古くから独自の文化を育んできた地域である。平取町二風谷では、ダム設置をめぐる収用裁決・明渡裁決の取消を求める行政訴訟いわゆる「二風谷ダム裁判」がおこされている。

二風谷ダムが建設された沙流川流域は、かつて豊かな森林に囲まれた地域だったことが多くの文献に残されている。しかし明治前期から開墾入植が行われて以来、森林が次々に伐採され、さらに拡大造林政策によってカラマツが植林された。アイヌ民族は北海道旧土人保護法⁵(通称「アイヌ文化振興

法」⁶の施行により廃止)により、その独自文化を禁止され、生活様式を大きく変更しなければならなくなった。さらに前述した森林伐採や単一樹種の植林により、平取地域の植生は大きく変化し、アイヌ民族は自然環境に依拠した文化による生活を営むことができなくなった。また1908(明治41)年に施行された「北海道国有未開地処分法」により、アイヌ民族が生活を営んでいた土地は和人の手に渡り、アイヌ民族は生活の場すらも失った。この北海道国有未開地処分法により、現在、平取町の民有林の大半はM社所有林となっている。

平取町においてアイヌ文化は豊かな自然環境の中で長い時を経て継承されてきた。しかし独自文化を禁止されたことに加え、地域の自然環境の変化により森林資源を失ったり、土地そのものを失ったアイヌ民族は、現在、独自文化の伝承が非常に困難な状況に置かれている。

(2) チコ_ロナイの活動

チコ_ロナイは、アイヌ文化を重視しながら、ナショナルトラスト活動をはじめとする自然環境保全・再生活動と、学習・交流活動を行っている。さらに、保全・再生活動と学習・交流活動をまたぐものとして文化伝承活動を行っている(淀野2004など)⁷。

チコ_ロナイの活動の大きな柱はナショナルトラスト活動⁸である。このナショナルトラスト活動によって買い取った山地には、天然林に近い森林の他、人工林であるカラマツ林を皆採した山地など、さまざまな状態がある。天然林に近い山林では、文化伝承活動の材料を採取したり、観察会などを実施している。一方、カラマツ林を皆採した山地には、アイヌ文化の継承に必要な森林資源を再生することを目指し、植林を行っている。さらにもとの植生に近い自然環境の再生を目指し、植林のための育苗もチコ_ロナイで行っている。このようにチコ_ロナイは、ナショナルトラスト活動に付帯する事業として、山林買取事業、植林事業、育苗事業を行っている。さらにチコ_ロナイは、森林所有者の固定資産税などの一部を負担することで、森林伐採をしないように求める保全契約を結ぶという、山林保全事業も同時に行っている。

学習・交流活動としては、「NPO法人 ナショナルトラスト・チコ_ロナイ」の総会後に開催される学習会の他、「チコ_ロナイ友の会」が月1回実施していた「学習会」「アイヌ語教室」といった定期学習活動が挙げられる。これらの学習活動については詳しく後述する。

文化伝承活動としては、アイヌ料理づくりやチブ(アイヌ民族の伝統的な丸木舟)づくり、サラニブ(オヒョウなどの糸を使った小さな袋)づくりなどを行っている。これらの材料は、チコ_ロナイ所有地や保全契約地の他、東京大学演習林などから入手・使用している。

(3) チコ_ロナイの組織展開

1) 活動前史

チコ_ロナイが組織されるきっかけとなったのは、「緑の地球ネットワーク(以下、GEN)」のメン

バーからの活動打診である。このGENは、事務局を大阪に置き、中国やネパールにおいて主に植林を行う団体で、活動を通じて、中国における自然破壊が日本の行動によって引き起こされたものであることに気付くとともに、中国での自然破壊の構造が北海道における自然破壊の構造と同様であると考えるようになった。そして、国際先住民年が開始される直前という時代背景のもと、北海道でアイヌ民族に着目した植林などの活動を行う可能性を探ることとなった。こうしてGENメンバーのT氏が平取町二風谷に調査に入ったところ、平取町に住むアイヌ民族が自然を守る活動をしたと記した遺稿集の存在を知る。この遺稿集をきっかけとして、T氏は遺稿集の著者の息子であるK氏に会い、自然を守る活動の協力を申し出た。

2) 第1期 GEN 内部組織としてのチョコナイ部会設立

GENとK氏は約1年間の話し合いを行い、自然を守る活動としてナショナルトラスト活動を行うことに決め、GEN内部に「チョコナイ部会」を設立した。1年間の話し合いでは、「活動の主体は地域住民」という考えに基づき、組織の目的やナショナルトラストという活動内容、運営方法などを決めた。GENの内部組織である「チョコナイ部会」はナショナルトラスト活動の他、ツアーや学習会、講演会を行うようになった。

この「チョコナイ部会」は設立当初から10年を目処に現地に組織を移すことや法人化が目標とされていたが、GENのNPO法人化を期に「チョコナイ」としてGENから独立することになった。(図1：第1期)

3) 第2期 組織分化とNPO法人化

GENからの独立を期に、「チョコナイ」は、「ナショナルトラスト・チョコナイ」と「チョコナイ友の会」の2組織によって構成することとなり、世話人としてT氏、現地世話人としてK氏が位置づけられた。それまで「チョコナイ部会」の世話人だったT氏は大阪から二風谷に移り住んだが、T氏は事務局を大阪のメンバーに託し、「チョコナイ通信」の原稿執筆などを行うことになった(図1：第2期-I)。

独立を期にNPO法人化した「チョコナイ」は、ナショナルトラスト運動を「NPO ナショナルトラスト・チョコナイ」⁹が行い、その他の事業については任意団体である「チョコナイ友の会」が行うこととなった(図1：第2期-II)。

4) 第3期 NPO ナショナルトラスト・チョコナイへの一本化

GENメンバーが事務局として運営していた「チョコナイ友の会」であったが、その役割を終えたとして活動を終了し、交流・学習活動は、「NPO ナショナルトラスト・チョコナイ」が引き継ぐこととなった。現在、チョコナイの活動は全て「NPO ナショナルトラスト・チョコナイ」が行っている。この「NPO ナショナルトラスト・チョコナイ」は、「チョコナイ友の会」と組織を一本化する以前と同様に、アイヌ民族であり地域住民であるK氏が理事長として、また二風谷に住んだ経験があるO氏が事務局となって運営している。この組織の一本化により、チョコナイとしての定期学習活動はなくなったが、

NPO 総会において学習会が開催されるようになったほか、適時、研修会や講演会を実施するなど、新たな学習の機会が設けられるようになった。(図1：第3期)

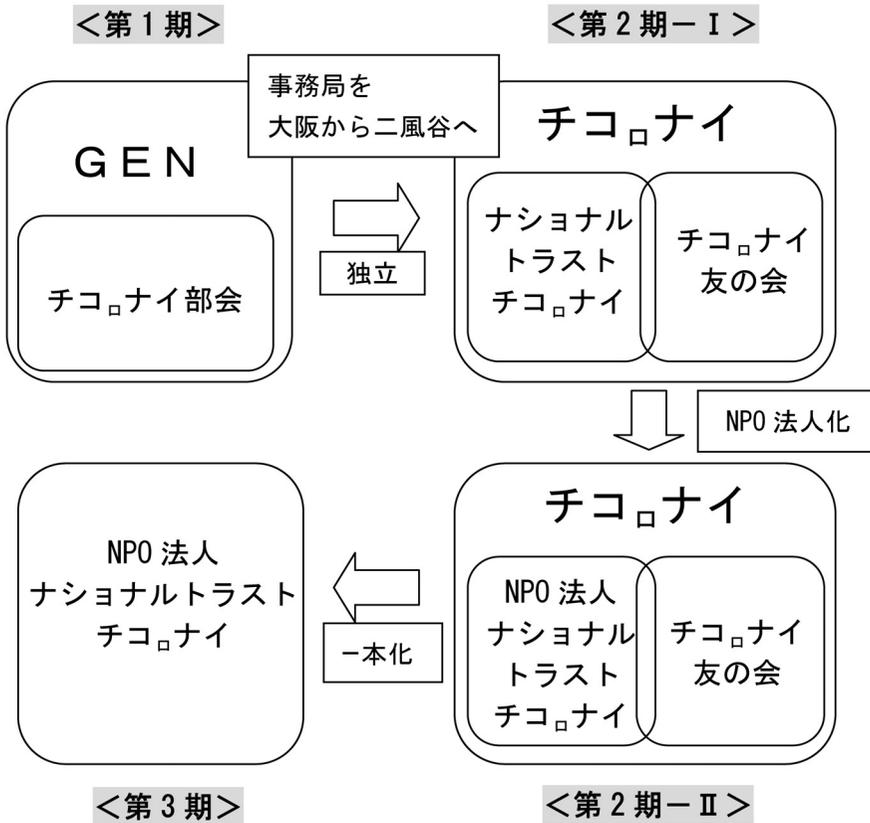


図1 チコ_ロナイの組織展開

(4) 組織・実践の展開と介入者のかかわり

チョコナイは活動を展開させる過程で、組織形態を変化させてきた。この組織形態の変化を見るにあたり、K氏をはじめとする平取町の地域住民と、T氏をはじめとする地域外住民の関係を再度、確認したい。

チョコナイは、GENのNPO法人化を機にGENから独立し、「ナショナルトラスト・チョコナイ」と「チョコナイ友の会」の2つの組織による「チョコナイ」として活動を進めた。この「ナショナルトラスト・チョコナイ」は、アイヌ民族であり平取町住民であるK氏が理事長となってナショナルトラスト活動をする組織であり、一方「チョコナイ友の会」は、GENメンバーをはじめとする大阪の会員が中心となって学習・交流活動をする組織である。つまり、「チョコナイ友の会」を「ナショ

ナルトラスト・チコ_ロナイ」の支援組織として位置づけたのである。

「チコ_ロナイ友の会」の事務局を担ったT氏は、「和人による森林破壊とアイヌ文化の禁止によって、アイヌ文化の継承が困難になっている」との考えから、チコ_ロナイ設立に関わり、設立準備段階から「活動の主体は地域住民」として話し合いを進めている。つまりT氏は、K氏および平取町住民・アイヌ民族は文化継承が困難な状況にされたいわば「当事者」であると考え、K氏を「ナショナルトラスト・チコ_ロナイ」の理事長に据え、地域外住民である自分たちは「チコ_ロナイ友の会」として支援するものへと運営組織を変化させていたのである。

このことから、森林破壊と文化継承などについての問題意識を持ち、チコ_ロナイの設立を提案し、「NPO ナショナルトラスト・チコ_ロナイ」の支援組織として活動する地域外住民は、意識的な「介入者」と言うことができるだろう。

以下では、「介入者」の学習活動を検討するため、「チコ_ロナイ友の会」における学習を見ていく。

3. 介入者の学習

チコ_ロナイにおける主な学習活動としては、「ナショナルトラスト・チコ_ロナイ」の総会後に開催される学習会の他、「チコ_ロナイ友の会」が月1回実施していた「学習会」「アイヌ語教室」といった定期学習活動が挙げられる。この定期学習活動は「チコ_ロナイ友の会」のメンバーによって大阪で行われており、アイヌ文化やアイヌ語（表1：A-1～11）、自然環境（表1：B-1、D-3）、アイヌ民族に関する歴史（表1：C-1～5）、世界各地の先住民族について（表1：D-1～4）など、多角的な学習が行われていた。さらに講演会に参加するなどしてアイヌ民族自身の語りを聞くことも学習会の内容として設定されていた（表1：E-1・2）。また学習会に参加するチコ_ロナイ会員による、チコ_ロナイ以外での活動についての報告も行われた（表1：F-1～3）。チコ_ロナイ以外での活動報告は、他組織とのネットワークづくりにつながっているとともに、チコ_ロナイの活動が客観的に考察できる機会となっている。さらにチコ_ロナイの学習会では、チコ_ロナイ会員同士の交流活動が行われている（表1：G-1）。この交流活動において、会員同士のコミュニケーションが深化している。

表 1 定期学習会内容

	学習内容
アイヌ文化 アイヌ語	<ul style="list-style-type: none"> ・イヤでもわかるアイヌ語—アイヌ語に秘められたおもしろい話、深い意味— (A-1) ・アイヌと日本の昔話の「語り」と絵本の紹介 (A-2) ・「アイヌの踊りと小学校での取り組み」踊り指導と報告 (A-3) ・アイヌ神話集紹介 (A-4) ・ビデオ鑑賞「アイヌ文化に学ぶ」 (A-5) ・アイヌ神話集成紹介 (A-6) ・二風谷のウポポ、古式舞踊、イナウづくりのビデオ鑑賞 (A-7) ・アイヌ紋様の刺しゅう (A-8) ・アイヌ文化よもやま話し (A-9) ・アイヌ文様の木彫り (A-10) ・アイヌ料理の調理・会食と交流 (A-11) ・国立民族学博物館見学と大塚和義教授のお話 (A-12)
自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・「チョコナイの森の植物たち」 (B-1)
歴史など	<ul style="list-style-type: none"> ・二風谷ダム裁判の判決を読む(C-1) ・「松浦武四郎の足跡をたどる旅、知床」(C-2) ・「見て、聞いて、感じて、考えたこと」卒業論文「日本人の中に生きる『アイヌネノアンアイヌ』」より(C-3) ・三重県松浦武四郎記念館見学(C-4) ・新聞記事を読む「楽しく特別授業『松浦武四郎まつふ』を活用、名寄中学」(C-5) ・日本とロシアによるアイヌ民族侵略の歴史(C-6) ・ビデオ鑑賞『共生への道』—日本の先住民族・アイヌ—(C-7)
他民族 ・民族文化	<ul style="list-style-type: none"> ・中国新疆の錫伯族およびその言語の現状(D-1) ・多言語国家ネパールの言語運動の波について(D-2) ・ビデオ鑑賞「倉本聡、カナダ・ハイダの教え」(D-3) ・アジアの先住民族問題について(D-4)
当事者の語り	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会『自分史を語る』(E-1) ・アイヌ語弁論大会原稿「スケアン ロー イペアン ロー」を読む(E-2)
会員活動報告	<ul style="list-style-type: none"> ・「京大アイヌ・沖縄を考える会」活動報告 (F-1) ・「天神崎の自然から学ぶ集い」参加報告(F-2) ・中国旅行報告(F-3) ・弁天町市民学習センター催しアイヌ文化体験交流集会参加(F-4)
交流会	<ul style="list-style-type: none"> ・たけのこ掘りとバーベキューパーティー(G-1)

(註) 「チョコナイ友の会」会報をもとに作成

上述した内容に加え、学習会ではチョコナイの運営計画や活動報告が行われている。学習活動と交流活動を兼ねる「二風谷ワーキングツアー」「子どもキャンプ」など、チョコナイでの活動の多くは、学習会内で企画・立案され、実施後も学習会内で報告されていた。さらに、GEN の一組織として設立

されたチョコナイがNPO ナショナルトラスト・チョコナイとして独立する際には、その組織運営が話し合われていた（表2）。

表2 学習会における運営計画作成と活動報告

運営計画	活動報告
・「二風谷ワーキングツアー」計画	・「二風谷ワーキングツアー」報告
・「子どもキャンプ」計画	・「子どもキャンプ」報告
・次年度計画	・1年間の反省
・ナショナルトラスト・チョコナイの組織運営・計画	・チョコナイ情報交換・活動報告
・「アイヌ文化体験交流集会」打ちあわせ	・「アイヌ文化体験交流集会」参加報告
・アイヌの刺しゅう「刺しゅう展」に向けて ・「アイヌ料理講習会」計画	・春の植樹・ツアー「山菜採りとアイヌ料理」報告

（註）「チョコナイ友の会」会報をもとに作成

チョコナイにおける介入者の学習の特徴とは、①体験的な学習が行われていること、②定期学習活動において多角的な学習が行われていること、③体験的な学習と定期学習活動が同時に展開されていることとすることができる。さらに定期学習活動における学習内容は、文化、歴史、自然環境、当事者の語り、社会構造などであったことが確認できた。

4. 活動と学習サイクル

チョコナイにおける学習の特徴の一つは、体験的な学習と定期学習活動が同時に展開されていることである。さらにこの定期学習活動である学習会においては、チョコナイにおける活動および組織運営についての計画と活動報告を行っていた（表2）。ここから、チョコナイは活動を展開する過程において、活動と学習が「計画—実施—振り返り」というプロセスをたどっていることを確認できる。

また、チョコナイの活動を報告した後、新たに活動や組織を変化させながらチョコナイの運営が行われていることから、振り返りの後に新たな活動への再計画が行われていたことを確認できる。ここからチョコナイにおける活動と学習は、学習を活動にフィードバックし、活動を学習することで、「計画—体験—指摘—気づき—分析—新たな計画」というサイクルをたどっていたと言える（図2）。

チョコナイの定期学習活動は、活動の捉え直しをするフィードバックの場であり、定期学習活動によって介入者にとっての「活動と学習」がサイクルとしての関連性を持つものとなっていたと言えるだろう。

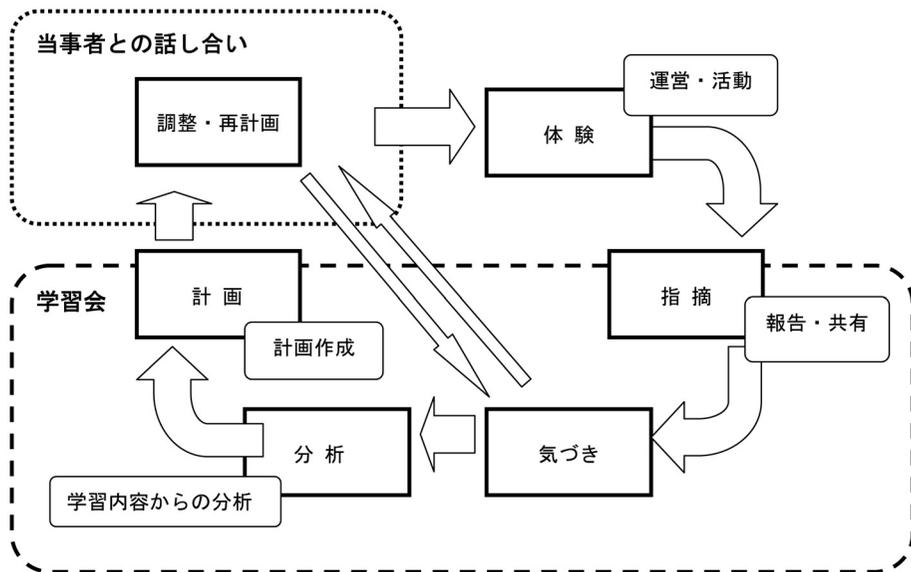


図2 チコナにおける介入者の学習サイクル

5. 当事者との話し合いにおける学習と活動展開

チコナにおける学習サイクルにおいて重視したいのは、「新たな計画—体験」のサイクルの間に、当事者との「調整・再検討」が行われていることである。チコナでは運営において、当事者と介入者とが話し合いを重ねており、その結果として組織形態や活動を変化させてきた。以下では、当事者としての地域住民を尊重した上での、当事者と介入者との話し合いにおける「調整・再検討」における学習と活動変化について考察する。

(1) アドバイスとしての尊重

チコナが組織されるきっかけとなったのは、地域外住民であるT氏が、地域住民であるK氏に活動を打診したことによる。T氏がK氏に活動の協力を申し出た当初、K氏は快諾せず¹⁰、準備期間を置くように伝えた¹¹。このK氏の考えに対し、GEN設立に携わった経験を持つT氏も「急ぎすぎではいけない」と同意したことから、GEN内部に準備会が設置された。準備会では組織形態のほか、活動目的、活動内容、運営方法などが決められた。つまり準備会では、当事者と介入者との調整が重ねられていたと言える。

準備会では、活動の主体になるべきはアイヌ民族であるとして「活動の主体は地域住民である」という基本的な考え方を定め、「国連先住民年の10年」にちなんで10年を目処にGENから独立させられる組織づくりのために、K氏の意見を尊重して進めることとなった。

組織規模について、準備会に参加した一人は、全国的に大規模な活動ができる大きな組織にしたいと意見を述べた。しかしT氏は「地道に小さいものから一步一步発展させる方がよい」と考え、当面はGEN内部の一部会として活動することとし、将来の活動の主体が二風谷住民になるよう、二風谷住民であるK氏を現地世話人として位置づけた。

活動内容を決める際には、「M社の森をアイヌ民族に返して欲しい」とするK氏の父親の遺志についての話が出され、その方法としてナショナルトラストを行う可能性が話し合われた。しかし、一部の準備会メンバーは、アイヌ民族に森を返すことには同意するものの、国が責任を持ってM社と交渉するように要求する運動のほうがいいのではないかと、という意見を出した。そのため、メンバーとK氏が話し合いを持ち、KT氏の遺志を尊重してナショナルトラストを行うことに決めた。

組織の名称については、将来、地域の組織として活動しやすくするために、「アイヌのお年寄りが聞いてピンとくるような名前」を二風谷のエカシ¹²に相談し、「チコ_ロナイ」¹³という名称に決めた。

以上に見られるように、チコ_ロナイ設立準備における調整は、介入者であるGENメンバーのT氏らが提案し、当事者であるK氏の意見をアドバイスとして尊重することで進められていたと言える。

(2) 当事者による違和感の発信と介入者の気づき

チコ_ロナイでは、賛同者を募るためにリーフレットを発行している。ナショナルトラスト第1期募金活動の際はリーフレットを作成せず、GEN会報での呼びかけをしていたが、この第1期の呼びかけ文には「チコ_ロナイ」のサブタイトルとして、「アイヌ・シサム 友好の森」と書いていた。しかし第2・3期募金活動のリーフレットでは、サブタイトルを「アイヌ・シサム 共に歩む森」に変更した(事例1)。

事例1 タイトルの変更 —友好の森から共に歩む森へ—

チコ_ロナイでは、活動への理解を促すことと賛同者を募るために、リーフレットを作成している。

第2期募金活動の際のリーフレットには、チコ_ロナイのサブタイトルとして、介入者であるT氏が考えた「アイヌ・シサム 友好の森」と記載していた。しかし第3期募金活動では、タイトルが「アイヌ・シサム 共に歩む森」に変更されている。

当事者であるK氏はこのタイトルがつけられた当初から違和感を覚えてはいたが、一気に削除を求めるとそれまでの過程を否定することになると考え、状況を見て、リーフレット作成の際にタイトルの変更を提案した。ここでのK氏の違和感とは「友好と言うと別々の組織が友好をはかろうという感じがする。アイヌとシサムは同じ日本に住む者同士なのだから、別々な扱いをしない方がいいのではないかと」という考えからきている。

T氏はK氏の発言を聞き、自らが同和教育に力を入れていた時を思い出し、「まっとうな日本の社会であれば、自分が贖罪意識により森林をアイヌの人たちに返さなければならない状況をつくらなくて済んだ。自分は活動をやっているという自己満足だ。20年前から進歩していないな。」と感じたという。

K氏の提案は、T氏などを通じて大阪の事務局に伝えられ、「地域の意見」を重視する形でK氏の意見が受け入れられ、タイトルが変更されることとなった。

この事例1は、介入者の考え方に対して当事者が違和感を提示し、それによって介入者は自分たちの考え方が当事者の望むものとは異なっていたことに気付いた場面である。チョコナイは「主体は地域住民」という考えに基づきながら活動を行っていることもあり、この気づきは定期学習会で報告され、当事者であるK氏の考えが尊重され、サブタイトルが変更された。

チョコナイ設立準備会では、K氏はGENメンバーの提案に対するアドバイスをを行う立場であったが、この事例1では、K氏から違和感が発信されている。つまり第3期募金活動を行っているころ(図1:第1期)、当事者であるK氏が自発的に調整を求める存在となったことが分かる。この発信の後、K氏からの発信が増え、チョコナイの組織変化につながっていった。

(3) 当事者による運営へ

チョコナイはGENから独立する際、「地域の組織」になるような工夫がなされた。その一例として、活動の目的に「アイヌ」という言葉を必要最小限にしか使用しなくなったことがあげられる(事例2)。

事例2 地域に受け入れられるように

NPO申請前までのチョコナイは、アイヌ民族の歴史や文化を前面に出したリーフレットを作成していた。しかし、NPO法人化の際、活動の目的に「アイヌ」という言葉を必要最小限に使用するとどめ、さらにリーフレットのタイトルであった「アイヌ・シサム 共に歩む森」を削除した。

このような変化を求める提案はK氏が「アイヌを前面に出すと、地域の人には特にチョコナイに入りにくい。」と発言したことにはじまっている。K氏はチョコナイの現状を「地元の人には完全に受け入れられていないと感じ、「アイヌ」という言葉を最小限使用することで、地域の抵抗を減らし、理解を得ながら地域に根付く運動にしたいと考えていた。

提案を聞いたT氏は、「自分がよかれと思ってしていたことが、地域にとってはそうではないのだ。」とショックを受けたが、同時に『「アイヌ・シサム」と書かなくても当たり前になったということで、なおかつ、それが地元を受け入れられやすいということなら良かった。」と思い、K氏の提案を受け入れた。

この事例2にあるように、K氏が発信した違和感は、活動の目的を変えるまでになった。つまりこの頃、当事者であるK氏は、活動目的を変化させるほど運営に大きく関わる存在になったのである。このK氏の発信により、T氏は「自分がよかれと思ってしていたことが、地域にとってはそうではないのだ」と気づき、ショックを受ける。しかしT氏はショックを受けると同時に、当事者がチョコナイを地域の組織として運営するものに発展したことを実感し、K氏にチョコナイ運営のための主体を移譲する。こうして、チョコナイのNPO法人格取得作業は、K氏が中心となって行うことになった。

NPO法人格取得準備は、GENメンバーではなく、K氏と二風谷住民が中心となって進められた。そしてK氏は「NPOナショナルトラスト・チョコナイ」の理事長に就任し、理事のほとんどはK氏の推薦によって決まった。このようにしてNPO法人となった「NPOナショナルトラスト・チョコナイ」は、現在に至るまで、当事者であるK氏を中心とした事務局が運営している。

6. おわりに

チョコナイの定期学習活動における介入者の学びとは、チョコナイでの活動をメンバーで共有し、活動内容を振り返り捉えなおすことにより、活動の意味を分析し、次の活動に反映させられるように考察するという、活動と学習の関連付けであった。つまり定期学習会は、活動における学習を、次の計画へとフィードバックさせ、活動と学習をサイクルに位置付ける場として機能していた。ここから、単なる活動や単なる学習ではなく、活動の総括としての学習活動が、新たな学びや活動発展のために重要であったことが明らかとなった、さらに、定期学習会における文化や歴史、自然環境、当事者の語り、社会構造などの学習は、活動を振り返ったり、新たな活動計画を作成するための分析に必要な不可欠だったことも確認できた。

ここで、介入者の学習サイクルにおけるフィードバックには、活動と学習、当事者と介入者という2つがあったことも確認できる。このうち当事者と介入者のフィードバックは、それぞれの考え方の差異・コンフリクトを調整するものでもあった。

チョコナイが活動を展開するにあたり、当事者と介入者の考え方が異なる場面は多々あった。しかし、介入者の考え方に当事者が違和感を覚えた場合は、定期学習会でそのことが報告され、当事者と介入者が考え方の差異を共有した上で、おおよその場合、当事者であるK氏の考えが尊重された。もちろん全ての考え方の差異が汲み取られ、活かされたわけではないが、「主体は地域住民」という考え方は、調整によって強化されている。

当事者による考え方の差異・違和感の表明は、アドバイスの表明から、自発的な発信へと変化しており、それに伴い、当事者が運営へ中心的に関わるものへ変化する契機となっていたことも確認できた。つまり、チョコナイにおいては、当事者と介入者の考え方の差異・コンフリクトは、組織運営や活動の変化や展開の契機となっていたのである。このコンフリクトにより介入者は当事者のニーズに気づき、その気づきから介入者としての在り方を変化させることで、介入の度合を減少させている。いわば、コンフリクトを契機として、当事者の主体性を増加させていたのである。このコンフリクトの調整の際に、当事者の意見が尊重されることが多かったが、当事者も介入者への配慮を行っていたことを確認しておきたい。

チョコナイは設立当初から、「主体は地域住民」という考え方に基づいて活動していたが、この考え方による組織運営や活動のためには、「意識的なパワーの移譲」が必要であった。さらにパワーの移譲のためには、当事者は当事者として、介入者は介入者として主体を形成することが必要であった。活動と学習を関連付け、当事者と介入者が「調整・再検討」を行うことにより、当事者・介入者としての関係が確認されていたと言えるだろう。

チョコナイにおいては、フィードバックの機会を多く設けることで、学習と活動をサイクル化し、当事者・介入者の関係を確認しあうことにより、介入者が存在しながらも、当事者が主体性を増加さ

せていたことが明らかとなった。さらに、当事者と介入者とのコンフリクトは、当事者の主体性の増加の契機となっていたことも明らかとなった。

以上から、チョコナイの実践活動の発達における学習の条件とは、①体験的な学習の場があること、②文化、歴史、自然環境、当事者の語り、社会構造などの多角的な学習活動が行われていること、③体験的な学習と学習活動が同時に展開されていること、④当事者と介入者のコンフリクトを学習の契機と捉えること、とすることができる。特にコンフリクトを批判的ではなく「未来志向的」に捉え、活動や運営主体を変化させる積極面として捉えることも、実践活動の発達にとって重要であったと言える。

本稿では、実践活動の発達における介入のあり方を、介入者の学習の条件から考察したが、当事者と介入者それぞれの主体形成や、各個人と集団の学習・活動の関係などを明らかにすることはできなかった。今後は、主体形成の過程をより詳細に明らかにすることに加え、各個人と集団の関係や、問題把握・課題の定型化、それぞれにおける学習と行為の変換などについて、より詳細に分析したい。

¹ 宮本憲一・遠藤宏一『地域経営と内発的發展-農村と都市の共生をもとめて』農山漁村文化協会、1998

² 保母武彦『内発的發展論と日本の農山村』岩波書店、1996

³ 山住勝広『活動理論と教育実践の創造 拡張的学習へ』関西大学出版部、2004、p. 69

⁴ ユーリア・エンゲストローム『拡張による学習』新曜社、1999

⁵ 1899年（明治32年）3月1日法律第27号

⁶ 1997年（平成9年）7月1日、アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（1997年（平成9年）法律第52号）

⁷ 淀野順子「アイヌ文化に着目した自然環境再生活動の展開過程-チョコナイの事例を通じて-」『社会教育研究第22号』2004

⁸ 2009年3月31日現在、4か所258,303平方メートルの山地を所有している。

⁹ 「NPO法人 ナショナルトラスト・チョコナイ」は、「アイヌ民族がかつてその恵みを受けて暮らしていた天然林を再生、保全し、それを後生に引き継ぐことにより、自然と人間のかかわり、アイヌ文化を学ぶと共に、環境の保全を図る」⁹ことを目的として活動している。会員は91名（2009年3月31日現在）であり、平取町住民の他、大阪や北海道内の会員が多い。チョコナイは、ナショナルトラストによって私有地の山林を買取り、また土地所有者と保全契約を結ぶなどの森林回復の活動を通して、北海道を本来のアイヌモシリ（人間の大地）として再生しようとする運動である。また、これらの活動により、かつてのアイヌ民族の自然と調和したアイヌプリ（生活のしかた）を学び、侵略と人権抑圧の歴史をふまえて、アイヌ民族とシサム（和人）とが友好を深めることを目指すとともに、アイヌ民族の精神や生活、文化を、回復し伝承していく活動の発展に寄与したり、「人間本来の真に豊かな生活」を考え直す契機としたいとしている。

¹⁰ K氏は、地域に入る多くの市民グループに対し、「アイヌのためとか何とか言って、騒いで、自分たちで報告書をつくって喜んで」ように見え、自己満足で自分たちのやりたいことをやり、引き上げてしまう事が多く、不快感を覚えていた。さらに、これまでの経験上、あまりに意気揚々として、急いで活動をすると失敗してしまうと考えていた。

¹¹ 「すぐやってもしょうがない。きちっと話し合いをして、始めなきやダメだ」とT氏に伝えた。「自己満足では困る。何年も続けて地元の人が受け入れるようになってこそ本当の運動ではないか。最低でも10年は続けてもらわないと同意できない」と話した。

¹² アイヌ語で「アイヌ民族の長老」を意味する。

¹³ 「チョコナイ」とは、アイヌ語で「私達の沢」を意味する。KS氏の話では、アイヌ民族は、昔、沢すじで川と山との恵みを受けて、その場所にコタンを作って暮らしており、そのような一角をチョコナイと呼んでいたという。